



私が「分身ロボットカフェ」で感じたこと

聖ヨゼフ学園高等学校 1年

川添 菜々子

夏休みのある日、新聞を読んでいたら、たまたま「分身ロボットカフェ」についての記事が目に入り、ロボットが好きな私はとても興味が湧いたので、その次の日に、日本橋にある分身ロボットカフェに行ってみることにしました。そこでは、病気を患っていたり、家族の介護をしていたりして、外で働くのが困難な人たちが、自宅からロボットを遠隔操作して、お客さんと話したり、食事を運んだりしていました。入り口で私に案内をしてくれた方は、自宅で病気の娘を介護している母親でした。その方は、「娘を横で見守りながら働くことができるため、とても助かっています。」と話していました。その声が、日々我が子の介護をしているとは思えないほど明るかったので、思わず私も笑顔になりました。そして、たとえばどんなに大変な状況下に置かれても、人とのつながりは私たちに活力や幸せを与えてくれるのだと実感しました。またその方は、「将来は娘と一緒に働きたい。」とも話していました。そうやって、この「誰もが人とつながることができる機会」は受け継がれ、どんどん広がっていくんだと感じたと同時に、私は単なる客ではなく、彼らとながらることでお互いを幸せにするという立派な役目があるのだと気づきました。その後に案内されたテーブル席にも小さいロ

ボットがいて、それを介して車いすで生活している女性とお話をしました。その女性は、「今日はこのカフェでの仕事のあとに、他の場所でまた働きます。」と話していたので、このような事業はだんだん広がっていて、より多くの人が他者とつながる機会を得られるような社会になってきていることを感じました。私には、何かすごい事業を創り上げたり、自ら社会を変えたりすることはできないかもしれませんが、いろいろな人と言葉をかわすことで、相手を、また自分自身を笑顔にすることなら可能です。そんな、言葉による他者とのつながりの可能性を感じさせる体験でした。

（審査評）とても素直な文章に出会いました。新聞の小さな記事の「分身ロボットカフェ」に目が入り、ロボットの好きな自分に興味が湧き、次の日にそのカフェに出かけた。病気を患っていたり、家族の介護をしていたり、外で働くのが困難な人達が、自宅からロボットを遠隔操作し、そのカフェにやってきたお客さんと話したり、食事を運んだりする様子をつぶさに見、体験を深め、ロボットカフェの役割や機能・魅力を感じた様子が素直な文章で描かれている。ロボットカフェの様子をこの作品のテーマとなっている「つなぐ」を自然と意識しながら文章を綴り、細かな表現で全体を語っている。とても分かりやすく表現し、ともすると暗くながちな内容を明るく、前向きに楽しく書かれたことが良かったです。

宮脇 一徳